これも
愛の形
アtorica

これも愛の形

突如として、何の前触れもなく、地獄のような日はやってきた。

「何だよ、コレ」

朝、学校に行き、授業を受け、数時間コンビニバイトをして帰る。そんな、なんの変化もない日常が、今日も続くと思っていたのに。

おんぼろなマンションに帰宅して、最初に目に飛び込んできたのは、見るも無惨に荒らされた部屋だった。

肩からずり落ちた鞄が、部屋の静寂を破るように音を響かせる。

「まじ、かよ。泥棒？」

テレビでは、よく泥棒に入られたり、強盗事件が起きたりして騒がれているなか、鍵をよくかけ忘れるのが俺の悪い癖だった。それでも、今まで誰にも侵入されたことがなかっ

たので、完全に油断していた。
全体的に部屋は荒らされているのだが、特にタンスの周りが酷い。綺麗に畳んで収納してあった服が、全て床に放り出されている。

「なんだよこれ!!」

学校に行っている間に、この部屋で一体なにが起きたのだろう。
身体がふらつき、近くの棚に腰をぶつけると、棚の上に置いてあった豚の貯金箱が床に落ち、甲高い音を立てて割れた。中からこぼれ出たわずかな小銭を見て、ハッと我に返る。
そういえば、お金は大丈夫だろうか。
金品が盗られていないか心配になって、机の上に無防備に置いてあったサイフを、乱暴に手に取った。財布の口を開ける最中、思い浮かんだのは、無表情の仮面をつけたかのような両親の顔。

「自立しろ」

高校を卒業した途端、親はためらいもなく俺を家から追い出した。
もともと両親との関係は良好ではなく、家を出ることで彼らとの縁が切れると思うと清々したし、おそらく親も同じことを考えていたのだろう。
家を出てから、今まで一度も連絡を取り合っていないからこそ、分かることがある。
「お金がない」と実家にすがりついても、あの二人なら、「自分でなんとかしろ」と言いながら、俺を追い出すということが。
こんな状況で、財布はもちろん、カードや通帳が盗まれていたら、学費は勿論、生活が成り立たなくなる。
半年前に別れた彼女に頼るわけにもいかないし、終わったかも、と思ったのに。

「……あれ？　なにも盗まれてない」

最近は携帯で支払うことが増えたためか、今日に限って財布を机の上に忘れてしまった。
探し回る手間を省いておきましたとでも言いたげに、机の上に財布が置いてあったというのに、何故盗まれていないのだろう。

「いや。盗まれてないなら、それはそれで良いんだけど。……よくないけどさ」

通帳や印鑑、カード類をチェックしてみたけれど、金銭関係のものはすべて無事だった。金銭目的じゃないとしたら、なんのために盗みに入ったんだ。

他に盗まれたものがないか、部屋の中を少し違う視点で調べてみるけど、荒らされてはいるものの、大切な物は何ひとつ盗まれていない。

服の山の中にしゃがみ、拾い集めながら首を傾げている間に、気づいてしまった。

「あれ、なんか俺の下着が……減ってる」

意味がわからず、拾った下着を再び床に落とした。

空っぽになった引き出しの中をよく見れば、下着が入っていた場所に、下着代のつもりか、お金が置いてある。

「え？　キモ……」

意味が分からず、不快感と不安から総毛だった。体中に寒気が走り、まるで氷を注がれたかのようだ。お金を置いてまで、なぜ俺の下着を盗んだのか、意味がわからない。

「けど、今はそんなことを考えてる場合じゃないよな」

警察に電話しようと携帯を手に取ったけど、親に知られる可能性が頭をよぎり、思いとどまった。

それに、「下着が盗まれたんですけど、お金は置いてありました」なんて、男として物凄く言い辛い。

泥棒が同じ家に何度もやって來るとは思えないし、しっかりと鍵をかければ、もう被害にあうことはないだろう。

迷ったけど、震える手で携帯を机の上に置き、荒れた部屋を片付けるために重い腰をあげた。

◇

「はよ、陸斗」
「おはよう、椿」

小野陸斗という俺の名を、呼び捨てしたのは、北条椿というイケメンだった。
見た目も中身も、俺とはまるで違う。まるで二次元からやってきたような男だ。
まず、顔が整っている。肌も白く滑らかで、シミひとつない。まつ毛は長く、影を落とすほどだ。髪も、俺の鳥の巣のような髪とは違い、綺麗な黒髪が常に整えられている。

（見た目だけかと思ったら、そうでもないんだよな）

頭も良いのか、先生に褒められているところしか見たことがない。授業へは積極的に参加しているし、椿に相談する学生まで現れる始末。もちろん、その中には俺も含まれている。
それに、彼の服装は高級ブランドのもので、高級車に乗っている姿も見たことがあるから、金持ちでもあるのだろう。
以前、さりげなく聞いたときに、大学生で既に起業して稼いでいると聞いたから、産まれた瞬間から運が味方についている男だなと思った記憶がある。

すべてが完璧すぎて、入学して直ぐに、学校中で噂になった程だ。初日にすれ違った人から告白されたという話を、風の噂で聞いたのを思い出す。

「不思議だよなあ」

そんな男と、全てで凡だよねと言われる俺が、なぜか大親友なのである。

それだけではなく、俺でも半年前までは彼女がいたのに、不思議なことに、このモテ男は恋人を作らないのだ。

「どうした？　元気がないけど」

「いや、昨日ちょっと色々あって」

昨日、泥棒に入られたことを思い出し、再びゲンナリと肩を落とす。

下着を片付けた後、改めて家中を調べたけど、貴重品は何も盗まれていなかった。そう、貴重品だけは。

なぜか、俺が愛用していた下着、歯ブラシ、食器、写真などは綺麗さっぱり消えていた。

それだけではなく、俺の体液が染みついたティッシュまで消えていたのを思い出し、鳥肌が立つ。
　真っ青になった俺を見て、椿が大きな手で、背中を優しく撫でてくれた。
「よし、元気のない陸斗に何か奢ってやるよ」
「まじ!?」
「ああ」
　一瞬で元気を取り戻した俺に何を思ったのか、椿の目元が柔らかくなる。
　俺の大好物は、近所の喫茶店のチョコパフェだ。しかし、男の俺がパフェに夢中になっているなんて、イケメンの椿には恥ずかしくて言いづらい。
　頭の中で一番に思い浮かんだチョコパフェを追いやりながら、他になにが食べたいか考え始めた瞬間、椿が口を開いた。
「チョコパフェ、だろ？」
「え」

頭の中を覗かれた気がして、心臓がドキリと跳ねた。
俺が甘党なのは、一番仲のいい椿にも教えていなかったのに、なぜ知っているんだろう。それだけじゃなく、チョコパフェを言い当てられたことで、なぜか近所の喫茶店のことまで知られている気がした。

「なんで……」
「結構長い付き合いだからな。陸斗のことは、なんでも知ってるよ。俺」
「……そういうもんかな」
「そういうもんだよ」

少し照れくさそうに笑う椿を見て寒気がしたけど、昨日の事件があったからだろうと思い、頭を横に振った。

「ん。じゃあ、もうバレちゃったし……今日はチョコパフェでも奢ってもらおっかな！」
「ああ、陸斗の好きなものは何でも奢ってやるよ」

「……そういうのは女子に言えよな」
「それは無理だな」

少し行動するだけで彼女ができるような男が、自らチャンスを逃そうとするなんて。モテ男の思考は一生理解できそうにない。
まあ、そんなことを言ってしまうと、チョコパフェを奢ってもらえなくなるかもしれないから、心の中で呟くだけにしておくんだけど。

◇

大学からの帰り道、俺の案内で、店の看板が古びて文字が読みにくい店へと案内する。いつもは一人で来る俺が、イケメンを連れてきたからか、店員の視線が俺たちに止まった。まるで、その顔は仕事中であることを忘れているかのようだ。
いつもの席に座り、傷跡のある年季の入ったテーブルの上にメニュー表を開き、椿と覗き込んだ。